

## イラン研修報告書

松尾健司

私は2017年12月21日から12月31日に開催された「2017年度イラン短期研修プログラム」に参加した。研修は内容豊富で、国際関係学院（SIR）での講義だけでなく、日本大使館、イラン商工会議所や外務省の方からも話を伺い、また地方研修ではイスファハーン、カーシャーン、コムも訪れることができた。さらに、SIRの学生が付き添ってくれ、多岐に渡ることを聞くことができた。



今回の研修では、イランの外交姿勢や経済政策について深く学ぶことができた。外交については、イランは反米姿勢を明確にしつつも、アメリカとの関係改善を望んでいると感じた。イラン人はアメリカに留学する人も多く、アメリカに対する文化的憧れがある。加えて、イランの経済問題の解決には制裁を解くことが欠かせない。むしろ、イランにとってイスラエルとの関係の方が厄介であると感じた。そもそもイランはイスラエルの存在を認めていない。歴史的経緯もあるだろうが、アメリカはイスラエルを支援するからこそ悪であるという構図が成り立っているように思えた。SIRのDehshiri教授は”Peaceful Coexistence in Middle East”の講義の中で、勢力均衡と集団安全保障を組み合わせた共存モデルを提起した。彼は地域アクターとしてトルコ、イラン、サウジアラビアの3国が役割分担的な勢力均衡を担うとした上で、域外アクターによる「重なり合う勢力均衡」の構成主体としてアメリカ、EU、ロシアを挙げて、イスラエルを共通の敵とする構想を提案した。この構想は中東の地域大国が秩序を作り上げた上で、域外大国がその秩序を前提に中東に参加するというもので、アメリカはイスラエルを実質見捨てる形ではあるが、構想の中に引き入れられている。

経済政策は、私自身がこれまで触れてこなかった分野であるだけに、見聞きすることに新鮮さがあった。SIRのShahabi教授は非常に率直で、イラン経済の問題を俯瞰的に眺めることができ、面白かった。教授は対外投資（FDI）も大事ではあるが、国内金融を働かせることによって国内投資を活性化することが重要だという意見を主張していた。これまで私はイラン経済の問題は国際金融市場から締め出されていることだけしか知らなかったもので、教授の意見は真新しかった。また、宗教法人によるビジネスをはじめとする非課税の経済がGDPの41%もあり、そこに課税していくべきであるという意見は新鮮であった。

さらに、イラン南東部に位置するChabaharの重要性の話は興味深かった。イラン政府はインド洋に直接出られる港としてChabaharの開発に力を入れている。私が前回イランを旅行した際、日本外務省の安全情報を見ると、Chabaharの周り（シスタン・バルチスタン）はレベル3なのに、Chabaharだけレベル2になっていることから記憶に残っていた

(2018年1月4日現在も同様の状況)。Shahabi 教授だけでなく、商工会議所やイラン外務省でも Chabahar の話を取り上げられた。商工会議所の方によれば、Chabahar は例えば中央アジアへの貨物輸送の重要な通過路になり、貨物輸送の日数が短縮され、イランにも溢出効果が期待できるとのことだった。考えてみれば、中央アジアは内陸国なため、輸送は沿岸国に頼らざるを得ない。もし、Chabahar が発展すれば、中央アジアとイランの関係がより強まるのだろうか。物流が国々の経済関係、外交関係を変えうるのかもしれないと、Chabahar の話は強く印象に残った。

SIR の講義では、イランが中東の地域大国としてどのように力を発揮するか、イラン経済の問題点と展望はどのようなものかについて学んだ。しかし、私自身、講義で学んだことは全てではないと後で気づいた。反政府デモで掲げられた "Not Gaza, not Lebanon, my life for Iran"<sup>1</sup> に見られるような内向きな声は今回の研修では聞くことができなかった。自分自身、現実の生活にとってどの程度の影響があるのか肌感覚で掴むことはできていなかった。勉強不足を恥じるとともに、社会の中の多様な意見に目を向ける大切さを学んだ。

今回の研修で、イラン人の友達が多くできたことは大きな収穫だった。本研修が私のイラン渡航 3 回目であったが、旅行ではイラン人と友達になる機会は少なかった。今回、かなりの時間イラン人学生と一緒に過ごしたことで、距離を縮めることができた。

言語を知っていたことで、イラン人と話すときに距離が縮まり、イランについての理解も深まったと思う。ペルシア語は前回の旅行に合わせて 9 ヶ月ほど自習したのだが、1 年くらい止めていた。今学期、ペルシア語中級の授業を学校で受講し、かつ出発前 1 ヶ月ほど自習をして口語をブラッシュアップした。現地ではほとんど英語を話していたので、ペルシア語を自分から話すことは少なかったが、それでもペルシア語で挨拶や質問をする機会があった。イラン人同士が挨拶として交わす社交辞令を具に聞き取ったり、現地の人とペルシア語で他愛もない話をしたりするのは素直に嬉しかった。

加えて、地名や気候を知っていたのは役に立った。以前 2 回の単独旅行を通じて、イランの大きな都市の名前を把握しており、いくつかは行ったことがあった。相手の出身地を尋ねると、大抵行ったことがあり、相手の驚いた顔を見て喜んでいた。講義や日常生活においても地名が出てくると、大体どのあたりだと頭の中で地図が浮かび、具体的にイメージが湧くことも多かった。

収穫が多かった反面、研修でもう少し聞いておけば良かったという反省もある。もともと医療政策や福祉政策について聞こうと考えていたが、質問があまりできなかったのは残念であった。また、イラン人学生の現状の課題認識と解決方法についても聞こうと考えていたが、2 人に課題認識を聞くにとどまってしまった。2 人とも失業問題をはじめとする経済政策と言っていたが、彼らの展望を聞くべきであった。今後の課題としたい。

---

<sup>1</sup> Aljazeera "Five things you need to know about protests in Iran" (2 Jan 2018)  
<http://www.aljazeera.com/news/2017/12/protests-iran-171231083620343.html>